

日本ボート・オブ・ザ・イヤー2009 選考委員が選んだトップ艇

日本ボート・オブ・ザ・イヤー実行委員会

山崎 憲治 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

ワールドトレンドに挑戦する勢いのラグジュアリー・スポーツ・クルーザーが日本で誕生したことを誇りに思う。

デザインコンシャンスであり、世界的にはコンパクトサイズでありながら随所に使い勝手のアイデアが生かされ、その上でエレガントさを漂わせる演出など、物造りの技としてのジャパンパワーを見せつけた。ワールドスタンダードを認識し、IPSシステムやアンチローリングジャイロの採用など、先見性とステージアップを志す姿勢も高く評価できる。

野村 敦 選考委員

シドゥ150スピードスター(BRPジャパン株)

シドゥ150スピードスター。昨年実際に試乗したボートの中では操船していて最も面白かった。今年「走り」の性能が魅力的なボートが最終選考に残り、非常に迷った。例えば、カボ36も荒れたコンディションの中で抜群の走りを魅せ、おそらく今シーズン乗ったボートの中では一番の走行性能だったと思う。またイグザルト36もIPS搭載で別次元の走りを魅せたとし、和製クルーザーの新たな可能性を見せてくれた。一方、同じくシドゥのPWCであるRXT-iS255は「ブレーキ」「サスペンション」という従来の「ボート」の常識を覆すインパクトがあった。しかしスピードスターを選んだ理由は、まるでゴーカートか何かに乗っているかのような「面白さ」につきる。用途としてはトウイングやランナバウト系の遊びだけに限定されそうだが、個人的には、「面白さ」を優先したかった。特に1人で乗って、ある程度開けた水面で乗り回したら、日ごろのストレスも吹っ飛んでしまうような楽しみにあふれているジェットボート。「これ、欲しい」と正直に思えたボートである。

堀江 史朗 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

従来の国産量販ボートには見られなかったエクステリア&インテリアのクオリティの高さは秀逸。IPSやアンチローリングジャイロなどへの取り組みも高く評価できる。

池田 幸寛 選考委員

ブレイカーズ61(株)安田造船所

国産艇としてまさに世界に誇れる仕上がりのブレイカーズ61。

発想、設計、デザインに至るまで素晴らしいの一言です。

また61フィートというサイズを全く感じさせない非常に素直で力強い走り、いかなるシーンでもこれぞNo1の艇。

ハル構造、新機能、新技術が満載で安田造船所の意気込みとセンス、そして技術力の高さを感ずるこの艇こそ2009日本ボート・オブ・ザ・イヤー大賞といたしました。

岡本 一明 選考委員

シドゥRXT-iS255(BRPジャパン株)

ブレーキとサスペンションが付いたPWCは過去に例がなく、非常に革新的な技術を採用している。

特にブレーキシステムは、PWCの制動距離を大幅に短縮できるため危険回避しやすくなるなど、安全面にも配慮されている点は高く評価できる。

川辺 一雅 選考委員

シードゥRXT-iS255 (BRPジャパン(株))

多人数乗りのPWCが主流になり、大型化、ハイパワー化が進んでいる中で、待ち望まれていた革新が、本艇によってついに実現しました。ハンドグリップのレバーを握れば、まるでオートバイのようにブレーキがかかる。その際の急激な沈み込みも、サスペンションが吸収してくれる。それは、とても自然で快適で確実な制動です。このブレーキ + サスペンションの採用によって、PWCは次の世代に入ったといえます。PWCの走りや安全の未来を示した艇として、大賞がふさわしいと考えます。

楠田 武治 選考委員

シードゥRXT-iS255 (BRPジャパン(株))

大型艇や中型艇などのオーソドックスなボートを選ばずに、PWCをボート・オブ・ザ・イヤーに選んでいいの？ と最後まで自問したが、2009年真に革新的な技術を搭載したボートとして、シードゥのPWCを大賞に選考した。その理由は以下の革新的な技術、世界初の技術を積極的に導入し、市販化したこと。この技術により、操作性、安全性を画期的に向上させている。このPWCの登場で、日本の海上の安全性が高まり、ひいては大型艇、中型艇、小型艇のユーザーのマリンレジャーの安全にもつながると思います。

1.PWC 史上初の電子制御フルサスペンション。

ハンドルバーとシート、そしてフットトレイまでアッパーハル全体で走行時の衝撃を吸収するという、画期的な電子制御フルサスペンション技術。あらゆる水面コンディションでコントロール性が向上し、安全性の向上にもつながる技術。

2.世界初の水上ブレーキシステム。

危険回避のために、即座に減速、回避するために有効な技術。ハンドルバー左側のiBR レバーを握ると、その入力信号の強弱とボートスピードから必要な制動力を割り出し、自動調節でスムーズな減速を実現していることに注目したい。しかも、すべての操作が、ハンドルに両手を置いたままで行える。また、ブレーキとリバースのiBRレバーをハンドルバー左に配置。両手をハンドルに置いたまま、安全で確実な操作が行える。この安全操作にも注目した。

今後、他メーカーには、世界市場を見据えて、このPWCを上回る新技術、新製品の投入を期待したい。

山本 亨 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機(株))

日本艇とは思えぬ卓越したデザインと高級感溢れる室内装備など、並み居る欧米艇に比肩できるほどの性能と装備を有している点は賞賛に値する。

野口 優 選考委員

シードゥ150スピードスター (BRPジャパン(株))

まさに自由な雰囲気魅力。海へ誘うような、その気楽さによって、新たなファンを増やしそうな予感がします。

廣田 晋 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機(株))

まるでシャチを思わせるその外観は、船に興味を持たない人の関心を引きつける。その個性は、「いつかは船が欲しい」と、誰にでも思わせるのではないだろうか。そんな強烈な魅力がある。そして、ジョイスティックや、地球ごま(懐かしい!!)の原理を応用した「アンチローリング」機能など、モノ好きにも堪らない魅力に溢れている。

秋沢 淳子 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

審査のたびにいつも心に置いているのは、私のボート・海の楽しみ方は釣りが中心の日本のボートシーンとは異なり、あくまで「クルージング」であるということ。多くの専門家や、審査員の皆様は「釣りLOVE」ですので(笑)、あえて私はクルージング派代表(?)としての、審査基準を持つと思っています。

さて、いずれ劣らず素晴らしいボートが並び、まさに甲乙つけがたい中ですが、最もクルージングやマリナステイを楽しむのに相応しいボートとして、また、日本のボートシーンの中にクルージング派が広がることを期待、応援し、今回はイグザルト36を選びました。

このボートはクルージング派の意見を真剣に聞いたうえで、しっかりと「クルージング」や「マリナステイ」に特化した個性を出し、優雅さはもちろんのこと、安全性、経済性、最先端といったキーワードにもしっかり答えを出した傑作だと思います。海外ブランドをものともしない秀作を作り出したヤマハさんに敬意を表します。クルージング派なら、是非オーナーになってみたい一艇ではないでしょうか！

石川 芳雄 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

ガンネルを廃する事でこれほどフネのデザインが変わるという事に驚きを覚えました。その流麗さと、IPSによる軽快な操作性、さらに室内の雰囲気などにより、サロンクルーザーの楽しみ方を提案しているのも共感を持ちます。また、このスタイリングを作り出す基礎となった精度の高い成形技術も評価すべきでしょう。

大場 健太郎 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

日本のボートはフィッシャーマンに偏りがちだった業界に、日本のメーカーでも、ヨーロッパスタイルの大人のボートスタイルに合わせた高品質なサロンクルーザーがお目見え、英国やイタリア、北欧など本格的なボートの中に置いても、遜色のない本物のサロンクルーザーに仕上がりに、すでに数艇の建造が行われている。欧米のボート業界にも中型艇として十分に受けられる品質やアイデアは合格点を与えてもいいのではないかと思います。

技術的な点でも、美しいラインのデザインを作り上げるためにガンネルのないハル構造やIPSドライブの性能を最大限発揮する新型の船型の開発など、またビルジキールやハードチェーンなど走行安定性、凌波性、ソフトな乗り味など快適なクルージングを迫している。サロンとコックピットの一体感を演出した使いやすいギャレー配置、広々としたFBスペースや、サンベッド対応のリクライニングシステム、集中電源システムなど、欧米のボートでは大型ボートにしか採用されない数少ない高級システムを中型ボートに取り入れている。

量産型のサロンクルーザーとして、日本の市場に大きなインパクトを与え、欧米の高級サロンクルーザーとも十分に競争力を持ったイグザルト36こそ、不調な日本のマリン業界を活性化させる一役を担う勇気ある挑戦として、今回の日本ボートオブザイヤーの一艇として価値あるものと賞する。

粕谷 俊二 選考委員

イーグル495SE(株)スナガ)

NO1として選んだ理由。それは日本のマーケットで一番数多くのユーザーに支持されるであろうボートであること。そして、何よりデザインが重要だ。ビルダーとしての主張を感じ取れる独自性と、機能と新製品としての魅力がクロスオーバーしていなければならない。どこかのメーカーを模倣したようなデザインは、性能は二の次にして僕には受け入れられない。もちろん、性能とコストパフォーマンスもポイントとなる。そういった観点からすれば、イーグルはすべての点において条件を満たしている唯一の商品ということになる。デザインでいえばアジムットが抜け出しており、新機能としてはシードゥだ。点は入れられなかったがカボの性能は大いに気になる場所であった。

喜多嶋 隆 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

今回、注目されるのは、イグザルト36と、ブレイカーズ61であろう。ともに、基本設計・デザイン面などを通じて、造り手の顔が見える、革新的ですぐれた艇だと思う。しかし、部門別投票の時にも書いたように、イグザルトのような大手ビルダーのプロダクト艇と、ブレイカーズのような、いわばカスタム艇を同じテーブルに乗せて比較することには、どうしても無理を感じる。日本ボート・オブ・ザ・イヤーというからには、やはり誰でも容易に買える艇に、賞を与えるのが妥当かと思うので、その点をかんがみて、イグザルトに票を入れた。しかし、ブレイカーズにも、造り手の強い思いと志(こころざし)が感じられ、これを無視する事は到底できない。そこで、ブレイカーズには、特別賞を…と考えた。この考えは、いまま変わらない。

木下 隆之 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

デザイン性に溢れていながら、使い勝手へのこだわりを感じさせる点を高く評価した。海外艇に迎合することなく、独自の視点で個性を注ぎ込んだ点も評価できる。IPSの採用にも加点した。

国沢 光宏 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

時代性を考えればECOで手軽な価格のフネがあったなら迷うことなく満点を投じていたと思う。しかし画期的なフネも無し。ということで、ECOは来年以降の楽しみとし、今年には日本のフネとして群を抜いたスタイルとクオリティを実現したイグザルト36スポーツサルーンに満点を投じさせていただきます。

小林 雄二 選考委員

カボ36エクスプレス(株)キーサイド)

外洋でも頼れる走航性能、実践的なフィッシャビリティと、確かな造り込み、かつ無理のない上質な空間。スマートさとスポーツフィッシャーマンならではの強さを感じさせるルックス。すべての面においてレベルの高さを感じさせる「CABO」らしい一艇。「質実剛健」に「色気」を備えたフネは、そうそうない。

鈴木 光司 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

以前に乗っていたSC36の後継艇であるが、すべてにおいて格段に進化している。向かい波での走破性も良く、離着岸の容易さも特筆もの。

永井 潤 選考委員

イグザルト36スポーツサルーン(ヤマハ発動機株)

スタイリング、ボート全体の品質、そして走り、完成度は高く、日本のボートもここまで来たかという印象。

山田 真人 選考委員

ブレイカース61 (株)安田造船所

今年のマイアミボートショーを見て感じたことだが、良いボートの基準として「走りが良い」「造りが丁寧」などというのは当たり前のこと。では何が違うのかというと、それは作り手の気持ちであると思う。幅広い人に使ってもらいたいというのも正解のひとつだが、価格や大きさ云々のことはさておき、こういうことをやる人に向けて、こういうボートを作りたいというピンポイントな尖った発想から生まれたものは、ライボピッチやリーバなどがそうであるように、のちに名艇と呼ばれるものになりうる。そういったボートがマリン業界をリードし、全体のレベルの底上げに貢献していけるのであれば、日本の海も変わってくるのではないだろうか。もちろんIPSの3基掛けやハルの工法など、最先端のものを数多く取り入れていることも称賛に値するが、それよりも日本の海に、日本で造られた、オーナーのための最高級のボートがあるというほうが夢があるように思える。頂点が高くなれば、裾野も広がる。もっともっと万人が夢を持てるようなマリン業界になるためにも、業界全体に一石を投じたモデルだと思う。

山本 秀正 選考委員

カボ36 エクスプレス (株)キーサイド

由良 拓也 選考委員

イグザルト36 スポーツサルーン (ヤマハ発動機株)

いままで、スポーツサルーンといえば、輸入艇の独壇場だったと思う。しかし、今回イグザルトの登場で、ようやく日本発信の良いフネが登場して来たと感じた。特に造形のトライアルにはオリジナル性を高く評価したい。
実際、販売も好調と聞いている。市場は日本発信でも良いものが出てくれば受け入れる事を証明しているんだとあらためて思う。

吉田 由美 選考委員

イグザルト36 スポーツサルーン (ヤマハ発動機株)

美しいデザインと高い質感、そして最新の技術搭載……
日本の国産中型艇クラス全体のクオリティアップにつながる一台となるのではないのでしょうか。

飯田 章 選考委員

イグザルト36 スポーツサルーン (ヤマハ発動機株)

やはり現地現物の実際の物造りや出来をみて評価した結果、ヤマハの一身をかけて作り上げた国産のサルーンクルーザーの仕上がりの良さで選びました。サイズ的にもちょうど良いし、IPSのシステムを導入し、扱いやすさ、安全性、安定感、耐航性等、納得できる性能を持って誕生できたと思います。今後のヤマハのボート造りの将来も見えてきて、本当にメイドインジャパンの出来の良さを世界にアピールできるボートが出来上がったと思います。

鈴木 亜久里 選考委員

イグザルト36 スポーツサルーン (ヤマハ発動機株)

国産艇として胸を張って世界に出せるレベルの船であり、小型艇としては細部にわたりキメの細かい仕上がりを感ずる。IPSシステムの導入並びにアンチローリングシステムの採用も大きなポイント。スタイリングに関してもヨーロッパの船に負けないデザイン。